

# 昨秋ぶりに100万TEU割れ

## ■待機コンテナ船、サービス復帰で減少傾向

不稼働状態にある待機コンテナ船が急速に減少している。海事調査会社アルファライナーによると、5月22日時点における待機状態にあるコンテナ船は229隻、船腹量ベースで94万6792TEUとなった。2週間前の5月8日時点から34隻減、船腹量ベースで13.9%減となり、昨年10月以降では初めて100万TEUを下回った。環境規制への対応策として、追加船の投入需要も高まっており、サービスへの復帰・投入が進んでいるほか、修理などでドック入りしている船舶も減っているようだ。

待機コンテナ船は、コロナ禍に伴う国際コンテナ物流の混乱により、2021年前半までは低水準で推移していた。だが、昨夏以降はコンテナ輸送需要が落ち込み、需給環境が軟化したことで、船社が欠便や喜望峰経由のルートへの変更などを増やした。この結果、昨年下半年から今年初めにかけて待機コンテナ船が急速に増加していった。今年2月には待機コンテナ船腹量が168万TEUまで増加し、全運航船腹量に占める待機コンテナ船の割合は6.4%にまで上昇した。しかし3月以降は、春節明けの荷動きの復調に合わせてサービスへの復帰が進み、待機コンテナ船は再び減少している。

アルファライナーによると、5月22日時点の待機コンテナ船の内訳は、

1000TEU型未満が5月8日時点から3隻減の48隻、1000～2000TEU型が5隻減の55隻、2000～3000TEU型が10隻減の24隻、3000～5100TEU型が6隻減の45隻、5100TEU型～7500TEU型が7隻減の17隻、7500TEU型～1万2500TEU型が1隻増の21隻、1万2500TEU型が4隻減の19隻だった。

商業的に不稼働状態にある待機コンテナ船は70隻・29万2513TEUとなり、前回調査から17隻・8万8391TEU減った。修理やメンテナンス中の船は159隻・65万4279TEUとなり、17隻・6万4495TEU減となった。全運航船腹量に占める待機コンテナ船の割合は3.6%となり、2週間

前と比較して0.6ポイント下落した。

足元では、環境規制への対応や航行中の温室効果ガス（GHG）排出量の削減を目的として、減速航海を進める動きが相次いでいる。国際海事機関（IMO）は、今年から就航船燃費規制（EEXI）と燃費実績格付け制度（CII）を開始した。EEXIに基づき、一部の船舶はエンジン出力制限（EPL）を導入しており、最高速度が低下している。さらにCIIのスコアを改善する手法として、減速航海は有力な手段となっている。こうした中で、減速航海とサービスの利便性維持の両立を図るために追加船を投入するニーズが高まっている。例えば、MSCとマースクで構成される「2M」は6月からアジア―欧州・地中海航路で計9隻を追加投入する。他社も含めて、今後も環境対応のため減速航海と追加船の投入ニーズは高まると予想される。中長期的には新造船の就航が相次ぐ予定だが、コロナ期間中に低調だった高齢船のスクラップが進む可能性があるほか、短期的には追加船の投入需要が高まることで、待機状態にあるコンテナ船は減少していく可能性がある。